

人と自然と文化にやさしい地域づくり

山口県教育

Education of the Yamaguchi prefecture

明日を拓く—成果を検証する

12

令和3年 No.1318



令和2年度 第73回山口県学校美術展 推奨作品

「反転」

山口市立白石中学校 3年(受賞時) 長岡 けい一郎

一般財団法人 山口県教育会

〒753-0072 山口市大手町2-18 TEL 083-922-0383 FAX 083-922-5768

URL <http://www.ykyoikuk.or.jp> E-mail ykyoikuk@ruby.ocn.ne.jp

明治36年4月第1号 毎月1日発行 発行人 会長:倉増誠彦/編集長:西岡 尚



■地域連携教育の推進

山口県教育庁 地域連携教育推進室
主幹 新居 淳治

■県立高等学校CS活動推進委員の取組

山口県立山口高等学校
CS活動推進員 山本 貴司
山口県立下関北高等学校
CS活動推進員 秋枝 一成

■地域との連携・商業科と工業科の協働

山口県立萩商工高等学校
教諭 小田 知志
福岡大学 商学部(萩商工卒業生)
岡本菜乃香

山口県立萩商工高等学校 電気・建築科
3年 松野 太紀
山口県立萩商工高等学校 総合ビジネス科
3年 田坂 実結

■幼児教育の推進

学校法人脇学園 松崎幼稚園
管理栄養士・栄養教諭 上杉 沙織

学校法人 徳山中央幼稚園
副園長 御手洗芳成

学校法人真福学園 ふくがわこども園
教頭 福田ひとみ

防府市立牟礼小学校
教諭 佐々木夏美

■わたしの潤い

熊毛支部
周南徳山支部
廣川 修司
久保田 尚

あなたの
アクションは…

山口県教育会がすすめる
「元気やまぐち」三つのアクション

- ◎あいさつ 返事で 明るいやまぐち
- ◎笑顔でつなぐ 安心やまぐち
- ◎ゴミ 落書きのない 美しいやまぐち



地域連携教育の推進

憧れを紡ぐ地域連携教育を願つて



山口県教育庁 地域連携教育推進室
主幹 新居 淳治

—小中学校文化祭にて、「地域の魅力化」をテーマに各グループで調べたり企画したりした内容を堂々と発表する児童生徒たち…



主体的な取組が次々と紹介されていきます。インタビューを受けた校長先生は、「大人から何かを学びたいという姿勢を常に感じる」、文化祭を参観された地域住民の方々は、「頼もしさを感じた」「私たちも教えられることができ多かった」と話されていました。そして何より、「大人になつたときに、地域を支えられるようになれたら」と力強く語った中学生の、まさにはつらつとした笑顔が印象的でした。

「大好きな自然や大人たちに見守られながら、子どもたちは、生まれ育つた故郷をしっかりと見つめ、未来を語ることのできる頼もしい存在へと成長していく、地域住民の方々は、子どもとの関わりを通して、大きな活力を得ていく」まさに本県の地域連携教育がめざす「人づくりと地域づくりの好循環」を具現したシーンでした。

超スマート社会の到来を迎え、人口減少、少子化・高齢化、地域コミュニティの弱体化などが叫ばれる中、これからの中の教育に求められるのは、知識やスキルの習得に加え、主体性や協調性、課題発見・解決力等の一層の伸長であると、新しい学習指導要領はうたついています。山口県では、平成18年から市町立小中学校へのコミュニティ・スクール導入を促進してきました。コミュニティ・スクールとは、学校運営協議会を設置した学

校のことであり、学校運営協議会では、「育てたい子どもの姿」や「めざす学校像」等について、学校・家庭・地域で共有を図ります。県教育委員会としては、それぞれが、子どもたちを育てるパートナーとして、思いや願いをしつかり熟議していただけるよう、その支援や助言を行つてているところですが、大切な視点は、「子どもたちの変容（成果）をどのように測るか」であると感じています。学校・家庭・地域が成果指標を共有し、それぞれの立場から関わり、成果をしつかり子どもたちに還元することで、達成感や自己有用感はふくらみ、新たな課題へのチャレンジ意欲が芽生えます。こうしたサイクルを機能させるのが、「コミュニティ・スクールの仕組みを生かす」ことと捉え、地域連携教育の核として位置付けているわけです。

そして、全ての公立小中学校、高等学校、総合支援学校等がコミュニティ・スクールとなつた今、次に向かう山口県の地域連携教育としては、校種間連携を中心とした小中学校からの学びの連続性と高等学校ならではの専門性の発揮、総合支援学校においては、「共生社会」の実現に向けた障害者理解に重点を置いて、取り組むこととしています。県教育委員会では、令和2年度から県内全ての県立高等学校等に「コミュニティ・スクール活動推進員（C.S活動推進員）」を配置し、市町立学校や総合支援学校、組織や団体等とのつながりづくりをコーディネートしていただいています。これらからの学校は、学校教育を学校内に閉じずに、関係機関との連携・協働体制の中で、子どもたちの力や心を育む必要があります。新しい学習指導要領の理念である、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、引き続きコミュニティ・スクールの仕組みを最大限に生かした地域連携教育を推進し、校種を越えた交流や私たち大人の本気の姿から「憧れの連鎖」を広げていきたいと思っています。

熟議を通じて連携・協働活動を推進

山口県立山口高等学校



高校生活3年間そして教員として
も4年間育ててもらつた山口高校の
CS推進員として4項目の業務内容
を意識しながら関わらせてもらつて
います。

昨年度は本校・徳佐分校で分散開催された第2回学校運営協議会での

シリテーターを生徒たちが務めました。各班ともしっかりと司会・進行を行い、一人ひとりの意見を引き出し、熟議を支援し促進していました。事前研修は1回のみでしたが、話しやすい雰囲気づくりと出された意見の整理に奮闘していました。

私は、平成17年の田万川中学校を皮切りに、厚東小学校・夢が丘中学校・豊北中学校とコミュニティ・スクールに取り組んできました。コミュニティ・スクールは、子どもにとつて「自分らしさ」を見つけるよい機会だと思います。

地域とともにある学校づくり

山口県立下関北高等学校



した。本校は「輝く未来の創造に挑む学校の実現に向けて」、分校は「徳祐分校の特色について」というテーマで全・定・通の全課程、分校の生徒を交えた熟議を行い参加者全員が当事者意識を持ち活発な討議となりました。

今年度の第1回学校運営協議会は、協議会構成委員である先生方以外に全・定・通・徳佐分校から多くの先

いて中高連携・校種連携に係る意見が出されていましたことを踏まえ山口市立白石中学校（松野下真校長）の生徒たちも参加しての熟議開催となりました。討議後のグループ発表も中高生徒たちが率先して行い、参加者全体で課題や解決策を共有する機会



の様子

生方が出席されており、とてもいいことだなと感じました。「地域とともににある学校づくり」・「学校を核とした地域づくり」は全教職員による情報共有と当事者意識が高まることが土台となりますから。

10月21日の本校第2回学校運営協議会では昨年に引き続き、全課程共通テーマとして「地域との交流・連携を活性化させるために私たちにできること」について熟議を開催。今年度は新たな取組として各班のファ



山口高校学校運営協議会・熟議の様子

日本庭園に配置されている石は、見える部分が3分の1で、3分の2は地面に隠れているそうです。「自らしく生きる」とは、その3分の2に気づくことから始まるのです。それに気づかせるためには、いろいろな体験をさせることが大事です。学校だけでは限界がある。地域や家庭の力が必要です。学校・家庭・地域が本来あるべき姿を考え、それぞれが持つ機能を最大限に発揮しながら地域の宝である子どもの育成にあたる

ある女生徒から「先生を見ていると、まるで夢を見るセールスマントみたい」と言われました。その一言が、私の目指すものに気づかせてくれました。よく、子どもたちに「自分らしく生きなさい」と言いますが、これは人生最大のテーマかもしれません。「自分らしく生きる」とは、未来の自分が、今の自分に何を期待しているのかを考えることではないでしょうか。

るというのか、コミュニケーション・スクールです。「そんなことをしたって、子どもはいずれ地域から外に出て行く。コミュニティ・スクールなんてやつたつて無駄」という人もいます。そのとおり、子どもたちはいずれ地域の外に出て行くでしょう。でも、だから力をつけて帰ってきてほしいのです。鮭は自分の生まれた川に戻ると言われています。それは、生まれた川の匂いを覚えているからだそうです。子どもたちにふるさとの匂いをしつかり覚えてほしいです。そのため、ふるさとの匂いをしつかり感じることができる活動を仕組んでいきたいです。

A wide-angle photograph of a large group of students in dark uniforms sitting in a circle on the polished wooden floor of a gymnasium. The students are arranged in several concentric circles, facing each other. In the foreground, two students are seated on the floor, facing away from the camera. The gymnasium has high ceilings, fluorescent lighting, and bleachers visible in the background.

夢が丘中学校での北高ガイダンス

A large indoor gymnasium with a polished wooden floor and a high ceiling supported by a grid of steel beams. In the center, a group of students in dark uniforms are seated in two long rows, facing towards the front. In the foreground, a student in a dark uniform is seated, facing the group. The background shows rows of bleachers and a large black projection screen on the wall.

地域との連携・商業科と工業科の協働

宇宙開発と着物

～最先端と伝統の融合（コラボ）～



山口県立萩商工高等学校

教諭 小田知志

はじめに

萩商工高校は、平成18年度より県北部では唯一の商業科・工業科をもつ公立学校として開校し、今年で16年目を迎える。現在、商業科2科、工業科2科に332名の生徒が在籍しており、「質実剛健」「至誠一貫」「知行合一」の校訓のもと、各専門分野におけるスペシャリストの養成を図るとともに、地域に根ざした学校として豊かな人間性を備えた人材の育成に取り組んでいる。

特に、3年生の必修科目である「課題研究」では、これまでの学習で身に付けた専門的な知識・技能を活かし、地元萩市を中心とした地域貢献活動を行つて

おり、これまで、「びわの種飛ばし大会」の企画・運営や市内バス停の木製ベンチの寄贈、観光PRビデオの制作などに取り組んできた。しかしながら、昨年から新型コロナウィルス感染症の影響により、地域イベントの中止や活動の自粛など、これまで行つてきた様々なプロジェクトが実施困難な状況となつてきている。

宇宙開発と着物の融合

「古地図で散策できる」と言われるほど、歴史風情

が今に残る城下町、萩市。2019年の「着物の似合う街大賞」で初代全国グランプリを受賞するなど、着物に対する愛着が大変深く、毎年秋には「着物ウイーク in 萩」というイベントも開催されている。本校では、これまでも「課題研究」の中で、本イベントの企画・運営に参加してきたが、昨年度は、コロナ禍で規模が



衛星設計コンテスト受賞作品

協働的な学びの実践

試作品を作るに当たり、工業科の生徒は、大手繊維

メーカーから提供していただいた難燃生地の耐火性に

ついての比較実験や、臭いの元となるアンモニアを裏

地にしみこませ、その後の消臭効果などの実験を行つた。

また、商業科の生徒は、工業科の生徒の実習服を参考に、工具を入れるポケットを着脱可能にするこ

とで、より機能性を高めたり、商品パッケージ等で培つたデザイン力を生かしてデザイン画の作成などを行つた。

た。このように、お互いの学科で学んだ知識や

技能を活用した学科間連携による協働的な取組により、

「着物の船内服」を完成させることができた。

全国コンテストの結果については、「日本ロケット

協会宙女賞」「ジュニア実験賞」の2賞に輝くとともに

「宇宙開発での男女共同参画促進につながる活動」

として高く評価していただいた。なお、日本ロケット協会会長である宇宙飛行士の山崎直子さんは、「重力が微小縮小されたこともあり、着物の素晴らしさを知つてもらうための新たなプロジェクトを考えなくてはならなくなつた。

こうした中、宇宙開発に活用できそうなアイデアを競い合う全国コンテストがあることを知つた。世界各国の人々が働く国際宇宙ステーションで、着物をモチーフにした船内服を日本人飛行士が着ることで、国際協力の大しさや異文化を尊重する意義を発信できるのではないかと考え、宇宙服と着物を融合させるプロジェクトがスタートした。

試作品を作るに当たり、工業科の生徒は、大手繊維

メーカーから提供していただいた難燃生地の耐火性に

ついての比較実験や、臭いの元となるアンモニアを裏

地にしみこませ、その後の消臭効果などの実験を行つた。

また、商業科の生徒は、工業科の生徒の実習服を参考に、工具を入れるポケットを着脱可能にするこ

とで、より機能性を高めたり、商品パッケージ等で培つたデザイン力を生かしてデザイン画の作成などを行つた。

た。このように、お互いの学科で学んだ知識や

技能を活用した学科間連携による協働的な取組により、

「着物の船内服」を完成させることができた。

毎日が新しく、充実した時間を作り出せたと思う」という生徒からの感想にもあるように、時代の変化にしつかりとアンテナを張り、引き続き、地域と連携した学習活動の充実を図つていきたいと考える。

また、今回の「着物の船内服」の製作は、繊維メーカーからの難燃生地の提供や、宇宙航空研究開発機構（JAXA）や山口大学、山口県立大学からの指導・助言

が新しく、充実した時間を作り出せたと思う」という生

徒からの感想にもあるように、時代の変化にしつかり

とアンテナを張り、引き続き、地域と連携した学習活

動の充実を図つていきたいと考える。

また、今回の「着物の船内服」の製作は、繊維メーカー

からの難燃生地の提供や、宇宙航空研究開発機構（J

A X A）や山口大学、山口県立大学からの指導・助言

など、様々なサポートがあつたからこそ、はじめて実現可能なものとなつた。この紙面をお借りして、改め

て関係各位に感謝申し上げたい。



普段、あまり宇宙のことを考えながら生活することがない中で、宇宙開発や国際宇宙ステーションの役割、船内服に必要な機能性等を調べながら製作を進めていくことは、決して容易なことではありませんでした。しかし、宇宙環境での着用を実現させたいという強い思いや、着物という日本の伝統的衣装を用いて国際交流の絆を深めたいとの願いから、皆と協力して、取り組みを続けることができました。また、衛星設計コンテスト最終審査会では「日本ロケット協会宇宙賞」と「ジュニア実験賞」のダブル受賞に輝き、本当に大きな達成感と満足感を味わうことができましたが、審査員からは、船内服の改善点についての助言もいただきました。

今回のプロジェクトを通して、改めて宇宙について考える機会を与えていただくとともに様々な視点から物事をとらえることの大切さを学ばせていただき感謝しています。高校を卒業した現在、こうした秋商工高校での経験を活かし、これからも充実した大学生活を送りたいと思います。



福岡大学 商学部
岡本 菜乃香
(秋商工卒業生)

「着物の船内服」の製作を振り返って



能については、山口大学の樋口隆哉教授に特別授業をしていただき、臭いの原因や実験方法についても教えていただきました。今後は、こうした連携授業での内容を参考にして、より機能的で快適な船内服の製作を行っていきたいと思います。

私たち、現在、課題研究で宇宙開発についての研究を行っています。宇宙開発といつても宇宙船や宇宙食をつくるのではなく、宇宙飛行士が国際宇宙ステーション(ISS)の中で着用する船内服の開発に取り組んでいます。そのため、今回の研究では、ISS内などの宇宙環境がどのような状況であるかを事前に知つておく必要があることから、実際にJAXAの担当者からオンラインで講義を行つてもらいました。その中で、特に船内服に求められる機能として、静電気の防止や抗菌消臭等が重要

また、消臭機能についても、JAXA連携オフラインによる協働的な学習



山口県立萩商工高等学校
電気・建築科
3年 松野 太紀

JAXA連携授業を通して



物ウイーク in 萩に参加し、実際に着物を着て萩の町並みを歩くという貴重な体験をしましたが、改めて着物文化の素晴らしさを実感することができました。また、先日「着物ウイーク in 萩」に参加し、実際に着物を着て萩の町並みを歩くという貴重な体験をしましたが、改めて着物文化の素晴らしさを実感することができました。ぜひとも、もっと多くの人たちに着物を着てもらいたい。ぜひとも、斬新なアイデアをこれからも研を究し、提案していくといきたいと思います。



山口県立萩商工高等学校
総合ビジネス科
3年 田坂 未結

着物の素晴らしさ

昨今、世界中で宇宙に対する関心が高まっていることから、本校では、昨年度から宇宙服の新たなスタイルについての研究を進めています。特に、私たちがこの船内服を通して提案したいコンセプトの一つ目は、ISS内において、宇宙飛行士が各国の伝統的な衣装をモチーフにした船内服を着て業務を行うことで、国際協力の大切さを改めて世界に発信したいということです。そして、二つ目はSDGsのジェンダー平等の実現に向けたジエンダーフリーなデザインの着物の船内服を考案することです。そのため、現在、JAXAや山口県立大学の水谷由美子教授から様々なアドバイスをいただきながら、デザイン性や機能面についての改善に取り組んでいます。

幼児教育の推進 食育・体験・連携



よく遊び、よく食べ、よく寝る

学校法人脇学園 松崎幼稚園

管理栄養士・栄養教諭 上杉 沙織

松崎幼稚園は「食育」に取り組んでいます。子どもたちの健康や地域環境の未来を守るのは私たち大人の責務です。2019年1月からは「おひるごはん」と称した全園児自園給食を作りました。管理栄養士が作った献立をもとに、当園の調理室で手作りした愛情たっぷりのおひるごはんやおやつを提供しています。子どもたちの健康の為になるべく添加物を使つていらない調味料を使用し、園の里山にある「風の子むら」の田んぼで子どもたちが育てたお米や、地域の農家のご協力を得て育てた有機野菜を中心を使用しています。食べ物への興味・関心や食べ物を大切にする心を養い、美味しく食べて元気に育つて欲しいと願いを込めて調理しています。



番の調味料です。

献立は、子ども向けメニューで：という保護者からの意見もあります。子どもが好むだろうと、お肉類や揚げ物など加工食品ばかりを並べることはかえって子どもの好き嫌いを助長し、健康を害することになりかねません。昔からある日本の「おふくろの味」は日本の風土で育つた作物を日本人の味覚に合う調理法で親から子へと伝え繋がってきたものであり、今の子どもたちにもやはり食べさせていきたいものです。そのため、献立は加工食品を使用せず、お肉も厳選したものを使い、お野菜をたっぷり使つて大人にも満足できるおいしい和食中心のメニューになっています。

午前9時10分になると築山に上り、男の子がバスの出発を待ち、午後13時45分になると新幹線を見るために屋上に上り待っています。そんな乗組み物に非常に興味のある子どもたちが乗り降りするようになりました。また新幹線の時刻表を書いてきました。また新幹線の時刻表を持つて、「徳山駅には○分に停まるんよ」と教えてくれたりと知つてることを誰かに伝えたいという要望になりました。このような活動の変化から、子どもたちから段ボールで新幹線を作ろうといふ話になり、子どもがお父さんに相談してみると本格的な設計図を作成してくれました。そして、①材料はど



相互主体の保育を目指して

学校法人 德山中央幼稚園

副園長 御手洗 芳成

乳幼児期には「よく遊び、よく食べ、よく寝る」という大切なサイクルがあります。子どもたちにおひるごはんをたくさん食べてもらうために朝のおやつを少量出しています。曜日ごとに違う穀物等を混ぜたおやつを出して、子どもたちの一週間のリズムを作っています。少し食べて体を動かすと消化酵素が出て、おながペコペコになります。空腹が一

迎えています。日々子ども理解を深め、遊びが面白い、もつとやつてみたいという興味関心から広がる身・心・頭の土台を育て、義務教育へと繋がる基礎を培いたいと考えています。そこで、徳山中央幼稚園の「遊び」では子どもたちが主体的に人・物・事柄に対話していく保育をどのように実践しているのか、ほんの一部ではありますのが、幼稚園の遊びの物語を少しお示したいと思います。

9時10分～13時45分から広がる遊び

午前9時10分になると築山に上り、男の子がバスの出発を待ち、午後13時45分になると新幹線を見るために屋上に上り待っています。そんな乗り物に非常に興味のある子どもたちの物語です。1ヶ月後、いつものようにはバスや新幹線を見ていた子どもたちは時刻表を持ってきて時間を教えてくれるようになりそして、自分が乗組り降りするバス停の名前を書いたまま持つてきました。また新幹線の時刻表を持つて、「徳山駅には○分に停まるんよ」と教えてくれたりと知つてることを誰かに伝えたいといふ話になりました。このような活動の変化から、子どもたちから段ボールで新幹線を作ろうといふ話になり、子どもがお父さんに相談してみると本格的な設計図を作成してくれました。そして、①材料はど



んな材料にするか②長さはどうやってはかるか③色はどんな色にするか④窓や扉をどうするかなどについて、興味関心をもつた子どもたちが話し合い、役割を決め新幹線を完成させました。また、7月には幼稚園に泊まる行事を知つていた子どもたちは、夜の新幹線が見れるんじやないかと当日の時間を決め、その夜にはみんなで屋上に上り、車窓の明かりの流れに歓声を上げ、新幹線の物語は一つの遊びのやまと超えました。

こうして乗り物が好きな子どもの発想から他の子どもたちへと広がり、その関係の中でこうしたらできる、いや僕はそう思わない、こんなことやつてみたらおもしろいなど興味関心から仲間と共に深く関わり、様々な体験を通して上手くいつたり、上手くいかなかつたりするプロセスを繰り返しました。

こうした教師と子ども、保護者との相互主体を大切にし、実践を今後共に育ち合える対話的実践を今後も続けていきたいと思っています。

わたしの潤い



「四十の手習い」から「六十の手習い」へ

熊毛支部
廣川 修司

ご縁に感謝

退職して、少しゆとりがもてるようになつたこともあって、今は「書道」に精を出している。始めたのは、「四十の手習い」の言葉通り、40歳になつた秋。今年の9月で21年を迎えた。

「書道」とは、筆と紙を通して自己表現することを目的とする芸術であると言られている。従つて、単に字を書くのではなく、字に思いや感情を込めて書かなければならぬ。しかしながら、退職前は、毎月の競書出品、春の字遊の会、夏の県書連展、秋の市美展、そして冬の師範試験に追われ、自己表現には程遠かつたように感じる。正直なところ、「提出日まであと僅か」という思いが先立ち、焦りながら作品を仕上げてきた。「出せばよい」とか、「できればよい」と安易に考えながら…。

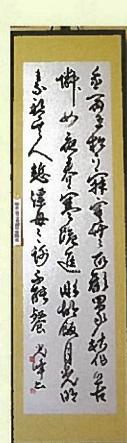
練習している「書体」は五体（篆

書・隸書・楷書・行書・草書）の中の楷書、行書、草書である。更に、より深みのある魅力的な線質や字形が書けるような技能を体得するために臨書にも取り組んでいる。楷書は、草書を崩した書体ではなく草書を整えて書いた書体であり、歴史的には一番最後に誕生した。太くどつしりした楷書、線が細く緊張感のある楷書など、その書風は実際に様々なで、点画が分かりやすく書き方も習得しやすいため、正式な書体として最も長く使用されてきた書体で

ある。当初はこの楷書が苦手だった。行書は、曲線的な形ですらすら書くことのできる書体で、楷書とともに現代で主流となつていている。また、草書と楷書の中間に位置する書体で、書き方次第で個性が表現でき、汎用性が高いと言われている。

草書は、前漢から後漢時代に早く書くことを目的として発達したもので、点画がかなり省略されており、流れのよくな運筆が特徴である。また、草書を書き崩して平仮名が誕生するなど、草書はその土台になつている。21年間丁寧に教え頂いている先生の草書は、二次元を超えた三次元の世界で、それを見ながら、「筆をどう動かせばよいのか」、「どんなリズムで書けばよいのか」、分からぬ状態で書いているのが、今の私である。

本来は、「四十の手習い」ではなく、「六十の手習い」であると、調べて分かった。まさに60歳を超えた今、「書道」の目的に辿り着くために、しっかりと向き合い、「六十の手習い」を実現していきたい。日々精進し、願わくば、「七十、八十の手習い」へとつなげていきたい。



令和元年度市美展出品作品

周南徳山支部
久保田 尚



ご縁に感謝

「子どもたちは自分を受け入れてくれるかな」「うまく指導できるかな」。初任のときの初授業？いえいえ、教職を10数年経験して、附属山口小学校に赴任し、音楽室で初めて音楽の授業をしたときの心境である。あれから20数年、またこうして同じ音楽室で音楽の授業をしている。

この春公立学校を退職したのを機に、縁あつて附属山口小学校からお声をかけていただき、音楽の「非常勤講師」として勤めさせていただいている。退職前の10数年は、小規模校での勤務が多かつたため、これだけの大人数（1クラス35人）を相手に授業をするのは久しぶりである。毎日毎日音楽の授業をし続けるのは、それこそ20数年前の附属小勤務以来だ。管理職としても子どもたちにかかることはできたが、「授業」を通してかかわられるのは嬉しいし、楽しい。なんといっても10数年ぶりに子どもたちから「久保田先生」と「職名」ではなく「名前」で呼ばれるのは、嬉しいやら恥ずかしいやら…。

教頭時代に「実務家教員」として山口大学教育学部に交流人事で派遣された経験があるが、これまでご縁でお声をかけていただき、春から大学でも教鞭を執らせていただいている



【お詫びと訂正】

情報紙「山口県教育」11月号で誤りがありました。

謹んでお詫びと訂正を申し上げます。

7ページ上段 誤→校長 内山 裕史
正→教頭 内山 裕史